

# 蝗とカラオケ

熊本県立大学

馬場 良二

## 「石の花」と「大地」

高校のとき逝った父が言うには、世界で最初のカラー映画はロシアの「石の花」だそう。フィルムに手で彩色したのだと言う。そして、パール・バックの「大地」では、イナゴの大群が地の実りを喰いつくした。「石の花」は子どもの頃に、テレビで見た。家のテレビは、白黒だった。「大地」は、大人になってからビデオを借りて、見た。

中学のころ、学習参考書と言えば旺文社で、文庫も出しており、「大地」を買って、読んだ。確か、うす緑色だったと思う。続編、続々編と3巻をそろえ、高校のときにも読んだ。同じ作品を二度読むことはまずなく、あんなに長い小説はなおさらだ。

主人公のワン・ロンは真剣で、質実剛健、ひたむきに働いて財をなし、女に溺れている間に、妻を病で失う。あばら家に妻を迎え、家庭をきずいていく姿は父に似ていた。

パール・バックを読み、大地、歴史、大金持ちの屋敷に農民たち、壮大なドラマ、それが私にとっての中国のイメージとなった。

1987年、留学生を受け入れている大学、日本語学校の教師、職員が国民党に招かれ、私も行った。台北、台中、台南をバスと鉄道でめぐった。列車から眺める田園風景は、緑が濃く、なつかしかった。台南では海辺の宿舎に泊まった。正方形の食堂は重層で、吹き抜けの2階の回廊の床からは、子どもたちの走り回る音が響いた。大声と笑い声、食器のぶつかる喧騒が天井からはね返ってくる。ワン・ロンの通った遊郭そのままだった。

貧農がイナゴの大群におびえるシーンで、ワン・ロンだけが筋骨隆々のマッコォだった。役者が白人だからだ。ワン・ロンが入れ込む娘は小さな纏足の杏のような眼をした美人だったが、映画では背中の割れたドレスからがっちりした筋肉がのぞく白人女だった。

## 台湾の友人

1973年、大学に進学し、ポルトガル語を専攻した。言語学に興味を持ち、2年生で日本語学概論を受講、日本語に興味を持った。

当時、使える葡和辞典は1冊しかなく、出版されている参考書は3冊だった。授業で配られるプリント以外、ポルトガル語を目にすることも、耳にすることもできなかった。英語なら、文法書や論文、ペーパーバックや英字新聞で英語にふれ、調

べたり考えたりできる。でも、ポルトガル語では、そこに書いてあること、教師たちの言うことを聞くしかない。それが、日本語は違った。説や論を吟味し、自分で考えることが日本語を勉強することだった。

世に出て働く自分など想像もつかず、日本語の院に進んだ。同級生の日本人は男が一人、女が二人、韓国人は男と女が一人ずつ、そして、台湾人のKKだった。

修士の2年に上がる直前から2年間ブラジルへ行っていたので、KKと机を並べたのは一年だけだった。帰国したとき、彼は別の大学の留学生となっていた。同窓になる前に研究生をしていた大学に戻っていたのだ。

同級生の中で、KKはよく輪を外れて一人でいると、話になった。台湾には緑の島と呼ばれる島があり、政治犯が収容されていると教えてくれたのは彼だった。そして、日本に来て初めて、台湾のこと、中国のことを知ったとも。

帰国して、神保町の中華料理屋でごちそうになったことをはっきり覚えている。メールのなかった時代、少しの手紙と年賀状のやりとりがあった。

そして、1987年の夜、ノックされ、台北のホテルのドアを開けるとKKが立っていた。すでに結婚し、評判の美人の奥さんのいる新居をたずねた。日本語学校につとめていることを話すと、「日本の日本語教育は、台湾人のための日本語教育だ」と言った。そう、あのころの留学生はほとんどが台湾からだった。私が「中国五千年」と言うと、「馬場くんは、五千年と言った。日本人は、みな中国四千年と言うのに」。シカゴの美術館でたまたま見た中国文化の特別展でそうあったのだ。

平成元年に今の職場の熊本県立大学へ赴任した。

この年、台湾で Hou・シャオシェン（侯孝賢）監督の「非情城市」が上映された。台湾全土の映画館で朝から朝まで上映しても、観客が見切れない。新聞によると、雨の降りしきる中、玉音放送が流れ、台湾の商家に産声が響くという。犠牲者が3万人とも言われる、国民党（外省人）の本省人への弾圧、その歴史に翻弄される一家を描いた映画だった。新聞で知り、東京へ見に行った。「冬冬の夏休み」「ナイルの娘」「戯夢人生」、畳の部屋、思いがあっても言葉に出せないヒトと人。心が引かれた。

「童年往事」のビデオを台湾からの留学生たちと一緒に見たことがある。村の住人が蛮刀を振りかざして暴れ回るシーンで、「ニホントー」と声が上がった。そして、そのような蛮行を「ヤマトダマシー」と言った。

2度目の台湾は1991年だった。熊本商科大学での教え子に会いに台北へ行った。教え子の親御さんがカラオケにつれて行ってくれた。50代ですでに引退で、昼間から集まっている。それぞれがカラオケビデオを持ってきて、小さなステージで歌う。穏やかな時、ゆったりした空気。流れる音楽は、日本の演歌、寮歌、そして、軍歌。

「台湾は、日本の植民地だったのでしょうか？ 憎んではないのですか？」

「憎んでいますよ。」

熊本に来て、家庭教師と塾のアルバイト、英語の教育実習以外では、生まれて初めて日本人を教えることとなった。教師養成だ。平成2年からは、韓国の姉妹校へ実習生を送った。2003年から2010年までタイにも実習生を送っていた。2008年頃だったか、台湾経由で引率し、帰国時に空港ホテルで会うことができた。

実習の引率ですることは、先方へのあいさつと授業の視察、指導くらいなのだが、なぜだか疲れる。タイの場合は、わずかだけれども時差があるし、国内線でバンコクへ飛び、待っている間にさらに疲れてしまった。そして、当時、私は尿管結石を持っていた。

台北のホテルで痛みはじめ、ほとんど眠れぬまま朝をむかえた。KKが来てくれたというのに、私は自分の元気がない言い訳ばかりした。KKは、肝臓をやられ、酒も煙草も医者に止められているとなげいていた。

そして、2年後、KKからの年賀状はなく、奥さんから訃報がとどいた。

2010年、台湾で日本語教育大会があり、院の後輩の台湾人が先輩の日本人と私を食事に招いてくれた。奥さんも来てくれた。その場で、私は奥さんに謝りたかった。KKは、病状について言いたかったのだ。私は、結石の痛みについて話そうとした。うまくことばにならない。第一、奥さんに言って何になるのだろう。その時、先輩が「よく話を聞いてあげられなかったのでしょうか」とことばをはさんでくれた。そう、話をよく聞いてやりたかった。

## 大陸へ

中国人をはじめてみたのは、大学のキャンパスだった。1972年に田中角栄が訪中し、留学生が来るようになっていた。人民服を着て、いつも三人で行動していた。

1982年に新宿南口にある日本語学校につとめはじめた。できて2年目で、4月クラスと10月クラスが一つずつ、合わせて20名くらいだったと思う。7年後には、200名をこえていた。

母体はファッションスクールで、学生は台湾からの女子が多く、1/3は内部進学、1/3は大学、1/3は外の専門学校だった。1989年に熊本に来るころも、中国人は数名しかいなかった。

1989年から同じ熊本市内にある熊本商科大学（現在の熊本学園大学）で非常勤講師をし、外国人留学生に授業をした。台湾人も中国人もいた。天安門事件の翌日の授業に、北京生まれのやせた男子学生が黒い腕章をしてきた。身はここにあっても、魂は広場を見つめていた。私のできることは、いつもの授業をすることだった。

LKがそのクラスに来たのは1991年だったと思う。18歳だった。高校を卒業し、すぐに日本へ来たことになる。大人でない中国人の私費留学生は、とてもめずらしかった。「ラスト・エンペラー」を見て感動し、夏休みに一時帰国をした彼を訪ねて、生まれて初めての中国へ行った。

天安門は広大で、天壇は美しかった。

紫禁城は「ラスト・エンペラー」そのままだったが、文物は見栄えがしなかった。台湾へ渡っているからだと思う。

北京原人の骨が今どこにあるか誰も知らない。家ほどもある石なんかは別だが、列車に積まれて大陸を右往左往する間に小さなものは誰かのポケットに入ってしまった、中国人はそういう人間なんだ、何でも自分のものにしないと気がすまない、KKが言っていた。

1998年からは、中国広西壮族自治区の区都、南寧にある広西大学へ実習団を派遣している。広西大学での実習が実現したのは、そもそも、広西壮族自治区と熊本県とが姉妹関係にあったからだ。南寧には熊本の県事務所があり、常時職員が派遣されていた。

1997年に八代市の青年会議所の招きで広西大学から教授が来熊した。熊本県立大学も見てみたいという申し入れがあり、韓国での実習のための授業に来ていただいた。静かに座って聞いていたが、講義が一段落したところで、「中国へは来ないんですか？」「もちろん、受け入れてくれるところがあれば、行きますよ」。翌年、学生二人が南寧へ飛んだ。

広西壮族自治区からは、毎年留学生が熊本に来ていて、私も何度か受け入れた。

大学院の学生だった時、日本語教授法の先生から「中国からの男子学生は、女子学生と歩くのをいやがる。男子は服装を変えれば日本人と変わらないが、女子はどうやっても野暮ったい」と聞いたことがある。

それが、1995年ごろだったろうか、国際交流担当の県職員が中国からの留学生二人を連れてきた。私が受け入れることになった女子で、外事弁公室の職員だ。県職員は、男性と女性がついてきた。年頃が同じ女性が三人。留学生がどれか分からない。一番やぼったいのは、日本人だった。

私の勤めていた新宿の日本語学校に初めて中国人学生が来たのは、1986年ぐらいだったろうか。1989年に熊本に赴任して、気づいたら日本の留学生のほとんどは中国人になっていた。人生を賭けて海を越えてきた彼らは、時を惜しんで働いていた。親に言われて日本へ来たと言う学生におどろいたのはかれこれ6、7年も前だろうか。今、日本語学校に中国人はいない。学生を求めて日本の大学が中国をめぐる、中国人が集まるのは大学院進学に特化した日本語学校だ。

2005年、引率の帰りに南京の外国語高校で教えている卒業生を訪ね、上海の近く

の嘉興（チャーシン）市でもとの研究生に会った。

元研究生は共産党員で、党の推薦で日本へ留学、4年制大学を卒業している。日本企業に就職し、中国工場の責任者となっていた。幸せな結婚をし、女兒をもうけ、時々家族で日本を旅行する。日本に知人も多く、恩人もいると言う。お昼を食べながら、日本軍に殺された親戚はいないかと聞くと、いない、でも、おじいさんの家が焼かれました。やさしく答えてくれた。

### 漢語の恩恵と日本

言語が新しい語を獲得する方法は、三つあって、三つしかない。新しく生み出すか、ある語を加工するか、外から持って来る。外来語だ。日本は、先進的な文化とともに大量の中国語を移入した。

日本語学には「語種」という用語があって、日本語の語種には大きく二つ、和語と外来語がある。和語は「あなた、イネ、歩く」などの日本語固有の語で、外来語には中国語由来の漢語とそうでない外来語とがある。

なぜ日本語に「語種」という概念があるかという、語種によって語のふるまいとすがたとがことなるからだ。

たとえば、品詞。和語には名詞、動詞、形容詞、形容動詞、接続詞、助詞、助動詞、感動詞、副詞、すべての品詞がそろっているが、漢語、外来語の場合、そうはいかない。名詞、「する」をつけて動詞、「な」をつけて形容動詞まではカバーするが、他の品詞は作れない。歴史が古く、日本語になじんでいる漢語では、「全部、結局、所詮」などの副詞や最近あらわれた接続詞的な用法の「結果」があるが、カタカナ言葉の場合、文法的なふるまいへの制限はきびしい。

学生のとき、「オーケー」の品詞は何でしょうか」と聞いたら、バカな教授に「そりゃ、もとの言語（英語）の品詞を調べればわかるだろう」とさとされたことがある。そんなことがあるはずがない。他言語起源の語でも、日本語に入ってきたら日本語の語だ。そのふるまいは、日本語の体系内で決まる。中国語で「緊張」は形容詞だが、日本語では動詞だ。日本語学校時代、台湾からの学生たちは、「日本の生活は緊張です」と言っていた。

すがたもそうだ。本来、日本語に拗音、撥音、促音、長音はなかったという学説があるそうだ。だから、現代日本語でも和語は自立拍で構成されているし、自立拍だけで構成されている語は和語のことが多い。

漢字の音読みは中国語起源で、1拍か2拍であり、2拍の場合、2拍目は「イ、ウ、キ、ク、チ、ツ、ン」しか来ない。音（おん）には拗音があると言っても、「みゃ、みゅ、みょ」では「みよ」しかなく、しかも、「みょう」と長音になる。一方、カタカナ語であれば短い「ミュ（コミュニケーション）」までである。

日本語の音韻体系の中に、和語、漢語、外来語それぞれの音韻体系が存在している。そして、意味だ。「切る」を漢語、外来語で言うのと？ と聞くと、「切断する」、「カットする」と答えることが多い。基本的な意味は同じかもしれないが、オシャレな美容院では髪を「カット」し、「切断」なんか絶対しない。旅行社のパンフレットには「夏だ！ 沖縄だ！ ビーチへ行こう！！」とコピーが踊るが、「浜へ行こう」では網でも引くようだし、「海岸」だと夏休みの花火だろうか。

和語、漢語、外来語がそろわない場合もある。助詞、助動詞は和語でしかありえないし、和語、漢語に言い換えられない最新のカタカナ言葉は数多い。和語がないと言えば、「本」は漢語であって、「本」に相当する和語はない。「誕生日、バースデー」も同様だ。

中国文化の影響は、大きい。現代日本のよって立つ政治、経済、文化、学問、すべてが中国文化ぬきに考えられない。関係が良いとか悪いとか、そんなことは言っていない。隣国であり、すでに大きな恩恵を受けているのだ。中国や中国文化、漢字、漢語がすぐれているとか偉いとかは言っていない。ただ、すでにある関係をなかったことにはできない。

## 韓国とインドネシア

私の家人は、韓国人だ。1991年の秋、教育実習の引率で韓国のチョナン（天安）へ行き、熊本で知り合った友人とテジョン（大田）で会った。彼は留学を終えて、入隊していた。その友人が連れてきた大学の先輩が今の家内だ。

冬に会いに行き、彼女の友人たちと知り合った。みんな私を歓待してくれたが、一人の婚約者は気に入らなかったようだ。

「ここは、その名のとおり米どころだった。そのコメは日本軍が持って行った。韓国人は食べられなかった。」とつかかかるから、言い返した。

「戦争中も戦争後も、日本人はコメを食べられなかった。すべて軍が持って行った。」友人たちは、黙って聞いていた。

帰り道、彼女がつぶやいた。

「I think our history is a big problem.」

「It's not our history. It's their history.」

二人の前には、未来しかあっていいはずがなかった。

去年の引率は、インドネシアだった。落ちた飛行機が飛び立ったスラバヤ空港、そこから車で3時間のマランにブラウイジャヤ大学はある。文化学部日本語教育学科を新設するにあたって修士号を取らせるべく、インドネシア政府が日本語学科の教員、リクさんを熊本県立大学に送ってきた。無事に学位を取り、勤務校にもどっ

た彼女に頼んで、実習団を受け入れてもらったのだ。空港には、実家にもどって来ているというリクさんがご主人と二人で我々5人を出迎えてくれた。再会をなつかしむ間もなく、頼んであったマイクロバスに乗り、深夜の道をマランにむかった。

インドネシアは、活気があった。ショッピングモールは家族づれであふれかえり、学食でも、校舎の廊下でも学生がPCをひらき、勉強している。

実習生たちを残し、私は先に帰国した。マランからスラバヤへは、リクさんのご主人が車を運転してくれた。マランとスラバヤを結ぶ道路は多くの車が行き交い、道路整備でさらに渋滞している。そこをバスもトラックも飛ばして走る。早く運べば、もっと運べて、収入になるという。

ご主人は、フェイス・ブックの前からあったSNSでオランダ人と知り合った。オランダ人は大戦に従軍し、インドネシアの再植民地化政策に従事した。後年、再植民地化政策に従事したことを後悔し、美しいインドネシアにもどって、暮らした。リクさんのご主人と知り合って、友好を深め、ある日、道路わきの立ち木に激突して亡くなった。ご主人は、バスには乗るなど言う。空港からのマイクロバスも、運転手にスピードを出すな、出したら会社に乗り込むぞと強く言ったと言う。だから、「バスは安全だったか」とさっき聞いてきたのだ。

デビ夫人は、有名かと聞いてみた。有名かどうかには答えず、スカルノの夫人で、スカルノはこの国を作った。スカルノが今のインドネシアを作ったのは事実だが、スキャンダルも多かった。

そして、車の中で、父がインドネシアにいたことを思い出した。父は、8年を南洋ですごした。酔って機嫌がいい時、インドネシア語で歌い、話した。配給された物資を現地の人にやると、卵を山のように持ってきた、請われて仲人をしたことがある、とも言っていた。甸甸（ホフク）前進をすると爪に馬糞がつまった、顎の傷は銃弾のかすった跡。

「My father was here in your country at the World Wide War.」

「Really? Did he kill somebody?」

「I don't know.」

仲人をするようになったいきさつは何だろうと思ったことはあったが、父は人を殺したことがあるのだろうかと考えたことは、それまで一度もなかった。

そして、今、「大地」を見たとき父に言いたい。

